**№48　テーマ『激動激変の時代をどう生きるか』**

**講話日2009年4月13日**

**皆さん、こんにちは。今本当に全世界的な大きな経済変動が起こっていて、このアサヒグローバルさんにおいても、いろんな影響が感じられる現実ではないかと思います。これはアメリカ発のサブプライムローン問題に端を発する金融恐慌という形で起こってきた問題なんですけども、金融の急激な滞りというものが実体経済のお金の巡りというものにも影響を与えて、そしてお金が動かないということを通して、消費の停滞が生じて、いろんな意味で売り上げが落ちるとか、そういう形での急激な景気の後退というのが起こっているわけであります。こういう状況を現実の世界では100年に1回の大きな変動だと説明をしているんですけど、本当にこの激変・激動が100年に1回と言われるものなのかと、落ち着いて考えてみれば、20世紀を振り返れば初頭には第一次世界大戦があったし、それに引き続いてウォール街の大恐慌と言われる経済変動もあったし、またそれに続いて第二次世界大戦があって、日本は敗戦の憂き目を見る、そういう悲しい時代がありました。それからまたそれに引き続き朝鮮動乱とかいろんな事件があって、また昭和40年の大不況、今日の不況よりもっとひどい不況に日本の経済状況は陥った時代もありました。昭和50年前後を考えれば石油ショックという大きな問題があって、トイレットペーパーが店から消えてしまう社会現象も起こりました。1980年から90年にかけてバブルとそのバブルの崩壊という状態で日本は大きな苦しみを経験しました。21世紀に入ってから資本主義経済の牙城であるアメリカが崩れるという状況で、アメリカが全世界に助けを求めなければない状況にはなってきているわけです。だけど確かに今の経済変動は相当に世界的に大きなものだと言うことは出来ますけども、20世紀にあった戦争の時代を考えれば、あるいは日本においては敗戦という状況で貧しい苦しい時代を過ごさなければならなかった…そのときからするならば、それほどに経済的な困窮に陥っている人が80〜90%になっているという状況ではない。そのことを考えれば、今日の激変・激動の状況というものも決して100年に1回というほどのものではない。ということは、時代は常に激変・激動を繰り返しながら歴史を刻み進んでいるんだ、と考えていかなければならないと思います。**

**そういう意味では、我々は常にいつの時代でも激変・激動への備えを持っていなければならない。また経済社会の現実を考えれば、毎日毎日さまざまな同業者間の競争があり、また毎日毎日どこかの会社が潰れ、また新しい会社生まれる。そういう状況で、また自分の生活を考えれば激変があるかもしれない。また社会に激変があるかもしれない。何かしら犯罪や事故に巻き込まれるかもしれないと、人生そのものが既に誰にとっても激変・激動の状況の繰り返しと言うことができるようなものである。その意味では、我々は常に激変・激動に備える気持ちを持っていなければならないのではないかと思います。ということはつまり、激変・激動ということは思いもよらざる問題が生じるという状況ですので、そのことを考えるならば、我々が人生を逞しく生きていこうと思ったならば、常に問題の発生を恐れない気構えを持っていなければならないと思います。**

**だけど、多くの人々が「早く問題がなくなって欲しい」「早く悩みがなくなって欲しい」と、問題と悩みがないことが幸せであって、あることが不幸なんだと考えてしまっている人が、まあほとんどと言っていいほど多いわけです。ついつい問題と悩みがなくなることを願う。人間そのものが不完全ですから、だから人生において問題と悩みがなくなることはありません。いつでも人間は不完全であるがゆえに、社会も不完全である。また会社においても家庭においても、常に不完全なるがゆえの問題というのが存在するのである。だから問題がなくなることを願っている人は、結果としては一生不幸という状態にあることになる。問題は絶対になくならない。人間が不完全である限り、会社にも家庭にも社会にも問題はあり続ける。問題はなくならないんだ。いつでもどこでも問題はあるんだ。そのことを我々はよく理解していなければなりません。だから、問題が発生することを恐れることは人生からの逃げであり、仕事からの逃げであり、また自分自身の人生からの逃げだと言うことができるわけです。問題があること、これは決して特別な状況ではない。常にいつでも問題はあるんだ。問題があることが正常であって、問題がないということは却って異常なことだと考えなければなりません。問題があることは正常であって、問題がないことは異常である。**

**とは言えやはり、問題と悩みというのは苦しいから、どうしても早く問題と悩みがなくなって欲しいと思うんです。だけども、問題と悩みは、人間が不完全である限りなくなることはありません。とにかく、現実を生きてくためには問題を恐れない、問題が発生することを恐れない。問題は常にあるのであって、問題がなくなることはない。だから常に問題というものに立ち向かっていく。そういう姿勢を持っていることが、人間として人生を生きる基本的な在り方だと考えていなければなりません。問題というものは、ではなぜ起こってくるのかということを考えていきますと、問題もない悩みもないという状態というのは、「今のままでいいじゃん」ということになってきますから、だから問題と悩みがないということは、現状維持で保守的になってしまって、変化とか成長とか発展というものはないわけです。問題と悩みが出てくるから、どうしたらいいかと考えて、いろいろな変化が生まれ、成長・発展ができるのです。ということは問題と悩みは、あらゆるものを成長・発展させるために出てくるんだ、と考えなければならない。問題と悩みは確かに苦しいし、嫌なことなんだけど、問題と悩みがなかったならば、あらゆるものを成長・発展しない。自分の人生においても問題と悩みがなかったならば、自分の能力も人間性も成長することはない。会社にクレームやさまざまな失策や人間関係の問題がなかったら、会社は良くならない。社会において毎日毎日犯罪が起こり、事故が起こるんですけども、その犯罪すら事故する何のために出てくるのか。犯罪すら事故すら社会を良くするために出てくる現象である、と考えなければなりません。犯罪がなかったならば、事故がなかったならば、社会は停滞する。社会は動かない、社会は良くならない。現在よりも良くならない。犯罪があり事故があるがゆえに、社会はどうしたらいいんだろうと考えて、だんだんと良くなるという方向性に歴史はつくられていくのである。問題と悩みというのは、自分を成長させるために出てきてくれてるんだ。会社に起こる問題も家庭に起こる問題も自分の身の回りに起こるすべての問題は、自分を成長させるために、より良い方向性に自分を導くために出てきてくれてるんだ。という理解の仕方をして、問題を恐れない、問題から逃げない…そういう気持ちをまず我々は人生において持っていないと、激動・激変という状況を本当に乗り越えていく力というものをつくっていくことはできません。**

**今日の激動・激変も確実にこれは社会を良くするために出てきているのである。と考えなければなりません。問題と悩みというのは、自分で求めていくものではない。すなわち、問題と悩みは求めずしてやってくるものだ。これは人間の力を超えた、人智を超えた天の計らいであると考えなければならない。なぜ天は、なぜ宇宙は、なぜ歴史は、なぜ神仏は、我々に問題と悩みを与えるのであるか。問題と悩みは自分が求めるものではない、求めずしてやってくるんだ。求めずしてやってくるということは、それは人智を超えた天の計らいである。人間の力を超えたもののやることなんだ。なぜ天は、宇宙は、歴史は、神仏というのは、人間にそのような嫌な問題や苦しみを与えるのであるか。**

**そのことを考えるためには、命というものは母なる宇宙によって生み出されて存在するものである。我々の命もこれは自分でつくったものではない。自分の命もこれは宇宙の摂理の力によってつくられた命。それを我々は与えられているのである。宇宙によってつくられた命というものを、宇宙が成長させ進化させるために、どんなことをするか。自分が生み出した命、それは宇宙から言えば、母なる宇宙が生み出した個なる命と言うことができるものですけども、その母が産んだ子どもである命を成長させるために宇宙はどんなことをするかと言ったら、環境の激変という問題を与える。生物というのは環境の激変がなかったならば、進化しない。成長しない。だから、よく言われるようにガラパゴス諸島の生物、動植物たちは生きた化石と言われて、ガラパゴス諸島というのは周りを海に囲まれているから、あまり環境が変化しない。ガラパゴス諸島の動植物は古代の形をそのまま現在も持ち続けていて、命に変化がない、進化していない。なぜかと言えば、環境の激変がないから、何も問題がないという状況が続いているから、だから成長しなくてもいいと。古代の命の形をそのまま現在も持っているんだ、ということなんですよ。**

**ということは、問題がなかったならば、悩みがなかったならば、命は成長・変化しない。会社を発展させるためには問題が出てこなければならない。社会が成長するためには犯罪がなければならない。自分が成長するためには自分の人生に問題と悩みがなければならない。問題と悩みがなければ、「今のままでいいではないか」ということになりますから、そういう意味で環境の激変というのは、ある意味で全生物が絶滅するかもしれないというほどの大きな問題であります。だけども、全生物が絶滅するかもしれない大きな問題すら、それは母なる宇宙が、自らが産んだ子どもたちを進化させ成長させるために子に与える、愛ゆえの試練だと言うことができるわけであります。自分の人生において生じるすべての問題も、これもやはり自分を成長させてくれるために天が、神仏が、母が与えてくれる愛ゆえの試練という受け止め方をしていかなければなりません。**

**今日は新入社員の方もいらっしゃって、これから社会人としていろんな荒波を乗り越えていく、という出発点に立たれている方がいらっしゃると思うんですけども、社会で生き抜いていく心構えとして、問題と悩みは自分を成長させるために出てくるんだ。問題のない現実はない、常に問題がある。決して我々は問題から逃げたらいけない。問題の出てこないことを願ってはならない。それは自分の人生からの逃げだ。問題を恐れてはならない、問題は自分を成長させるために出てきてくれているんだ。出てくる問題を自らが引き受けて、それに立ち向かっていって、そして自分が成長していくという力をつくっていかなければならない。問題を恐れてはならない、そのことを心に留めておいてもらいたいと思います。そして、問題というのは常に自分を成長させるために、会社を発展させるために、社会を発展させるために、人類を成長させるために、問題と悩みは出てくるのである。**

**こういうことについては、あの有名な経営者であった松下幸之助さんが、「好況よし」。とにかく物事がうまくいっていて、会社も利益が上がっているときは、誰でも楽しいし、満足できる。だけど「不況よし」ともおっしゃっているわけです。不況のときにこそかつてない革新が生まれ、そこからかつてない飛躍が生まれる、と松下幸之助さんはおっしゃっています。どうしたらこの不況を乗り越えられるかを考えるわけですよ。「こうしてみたらどうだろう」「ああしてみたらどうだろう」と、これまで考えもしなかったようなことをいろいろ考え始める。そういうところから、創意工夫という力が生まれてきて、そして革新、かつてなかった革新的な、いろんなことをし始める。そういう能力が出てくる。そのことによって会社は大いなる飛躍を遂げるのである。**

**考えてみれば、我々は一体何のために世に生まれてきたのか。自分がこの時代に生まれてきた理由は何なのか。これは何回か、人間が人生においてぶつかる課題、問題です。「自分は一体なぜ生まれてきたのか」「自分はなぜこの時代に生まれてきたのか」と。人間が生まれてくる理由は、ただ一つ。歴史をつくるためなんですよ。人間が生まれてくるのは、新しい時代をつくり、新しい時代を呼び起こすために生まれてくるんですね。それは最も直接的な理由としては、新しく生まれてくる人間がなくなってしまったら、歴史は終わるからですよ。生まれてくるということは確実に歴史を一本前に進める。そういうことにならざるを得ない。人間が生まれてくることによって、なぜ歴史は進歩・発展することになるか、向上、良くしていくという道を辿ることになるのか。それは生まれてくる子どもというのは、過去の人間のふたり分の可能性を一身に受けて生まれてくる。すなわち、生まれ出てくる子どもというのは、お父さんからもらった遺伝子とお母さんからもらった遺伝子を自分の命に携えて、そして生まれてくるわけですよ。だから子どもというのは、生まれながらに親を超えて生まれてくる。**

**いつの時代でも大人たちは「今の若者は頼りにならない」と言って、自分たちが蓄えた能力からすれば、若い人間は未熟であるから、どうしても大人から見たら若い人は「頼りない」と見えてしまうんですね。いつの時代も大人たちは若者を見て「何をしているんだ」と思う。だけども、時代を見れば大人たちからバカにされた若者たちが、何十年か経てば必ずその親の世代を超えて、今までになかった全く新しいものをつくり、今までとは違う生き方をし、そして確実に時代をより良いものに変えていく。そういう結果を出すわけであります。なぜ生まれてくる子どもたちが常に大人の世代を超えて、新しいものをつくり、かつてなかった新しい能力を持ち、かつてなかった生き方をして、そして古代から今日までずっと発展・成長の歴史をつくり続けてくることができたのか。それは、単に子どもたちがお父さんお母さんから遺伝子をもらってくるということだけでは、難しい。なぜなら、それは、遺伝子は過去のものだから。新しいことはできませんよ。親と同じことしかできません。だけども、命というものは有機体である。であるがゆえに、命というものの中にお父さんからもらった遺伝子とお母さんからもらった遺伝子があれば、親からもらった遺伝子が自分の命の中で有機的に絡み合って、相乗効果として湧いてくるものがその子の力なんですよ。その子の力というのは、お父さんの力+お母さんの力…という足し算ではない。足し算であったら、それは過去を越えられられませんよ。命は有機体だから、お父さんお母さんがもらった遺伝子が自分の命の中で有機的に絡み合って、その相乗効果・シナジー効果として湧いてくる力が、その子の命の力だ。だからこそ、その力は過去になかった全く新しい力なんだ。**

**そういう意味で、皆さん方も皆お一人おひとりが過去の人間になかった全く新しい力を命に蓄え、命に潜在させて今を生きているわけであります。そのことを考えたら、生まれたからには過去の人間が誰もやったことないことをやって生きて死んでいかないと、この時代に生まれてきた価値はない。この時代に生まれてきたのは、過去の人間が誰もやったことないことを何かして、そしてこの時代を一歩前に進めて生きて死んでいく、それがこの時代に生まれてきた使命だ、役割だと考えなければならないということです。とにかく、問題というのは自分を成長させるために出てきてくれているんだ。だから、問題から逃げないで問題とぶつかることによって、何かしら新しい、革新的なことをやって、そして歴史をつくっていく。そういう生き方を人間としてはしなければならない。**

**問題とか悩みというものは自分を成長させるために出てくる、ということはどういうことなのか。それは、人間が生きていくために必要な能力というのは、生まれながらに潜在能力として与えられているんです。そして、人間に生まれてくれば、全ての人間に共通の潜在能力が与えられています。それは遺伝子というものを研究すれば、それが分かってくるわけです。遺伝子を研究すれば、全ての人間に共通の遺伝子が与えられている。だから人間という姿形を持って生まれてくる。人間には生まれながらに共通の潜在能力を与えられている。そして人間というのは、生まれながらに母なる宇宙から与えられた潜在能力を自分の人生においてどれだけ顕現させるかによって、その人の人生の値打ち、レベルが決まる。人間にはホームレスになってしまうような生き方をされる方もいらっしゃるけども、アインシュタインのような素晴らしい人生を歩む方もいらっしゃる。生まれながらに持って出てくる潜在能力は全く同じなのに、なぜホームレスになってしまう人とアインシュタインみたいな人になる人が出てくるのか。それは潜在能力をどれだけ、いくつ自分の命から引き出すことができたかによって、その人生の違いは生じるのです。**

**だけど、潜在能力というものが出てくるためには何が必要なのかといったら、潜在能力が出てくるためには問題が必要なんですよ。だから皆さん方もずっと幼稚園から小学校・中学校・高校・大学と、ずっと学校に行って成長してこられたと思うんです。学校は常に子どもたちに問題を与える。小学校1年生のときには出てこなかった問題が、小学校2年生には出てくる。そのことによって1年生のときにはなかった能力が、2年生になったら命から出てくるという形で、学年が進むごとにいろんなことがだんだんできるようになり、成長していくとなるわけです。問題というのは潜在する能力を引き出すために与えられるものであり、出てくるものである。とにかく我々は、いろんな能力を持っているとしてもそれは全て生まれながらに与えられている力しか出てこないのであって、ないものは出てきませんよ。生まれながらに与えられている潜在能力というものを自分の人生の中でどれだけ引っ張り出すことができたか、そのことによって自分の人生の値打ち、自分がどれだけ豊かな生活ができるかが決まってくるわけです。成功するか失敗するかは、命からどれだけ能力が出てきたか、潜在能力がどれだけ出てきたかによって、その人の人生の豊かさが決まるわけであります。潜在する能力が出てくるためには何が必要なのかといったら、問題にぶつからなければならない。問題にぶつからないと潜在する能力が出てこない。**

**問題というのは、今自分の持っている力で解決できる問題は問題ではありません。今自分の持っている力で解決できない、なんともならないという問題こそ、本当の問題なんだ。だから学校で学年が進むことによって新たに与えられる問題というのは、前の学年で自分が身につけた能力では解けない問題が、高学年になると与えられるわけです。高学年になって新たに与えられた問題が、なんとか解いていこうとして勉強して苦労するんです。そのことによって、前の学年では自分になかった新しい能力が命から引き出されていって、学年が進むことによっていろんなことが分かり、いろんなことができるようになり、人間は成長していくわけであります。問題というのは、今自分の持っている力で解ける問題は問題ではない。本当の問題というのは、今自分の持っている力では解けない問題、それが本当の問題なんだ。**

**それを人生に置き変えればどうなるか。今自分が持っている力というのは理性能力と言われますが、今自分の持っている力である顕在能力、理性能力でいろんなことをやってみて、今自分の持っている力では何ともならないという状況にぶち当たったときに、本当の問題に出会うんです。多くの人は、その段階で「もうダメだ」「万策が尽きた」と言って絶望し、諦めてしまう。そういう人は平凡な人生で終わってしまう人なんですよ。人に使われっぱなしで、全くその人の個性が出てこない。そういう従属的な奴隷のような人生で終わってしまう。何かしら自分らしい力を発揮して、存在感のある生き方をされる方というのは、今自分の持っている力ではなんともならないという問題にぶつかったときに、「だけど何とかしたい」「このままで終わらない」と、何とかしようと思って頑張る。そうすると今自分の持っている力でなんともならないのだから、その問題を乗り越えようと思ったら新しい力が要求される。そういう状況になって初めて、命に潜在する能力が引き出されていき、そしてその問題を乗り越えていって、自分が新しい能力を持って成長していく。そういう結果になってくるわけなんです。だから、潜在能力を引き出してこないと、人間は成長できない。だから問題というのは、命に生まれながらに与えられている潜在能力を引き出すために出てきてくれているんだ、と考えなければならない。自分自身がいろんな人生の問題と悩みにぶつかったときに、「問題と悩みは命にまだ潜在する能力を引き出すために出てきてくれているんだ。今自分の持っている力で解決できない問題は、命にまだ潜在している、まだ出てきていない能力を引き出すために今自分の力で解決できない問題が出てきてくれているんだ。だからここで諦めたらいけない。ここで逃げてはいけない。その問題を何とか乗り越えようと思って、頑張っていれば、確実に命に潜在する能力が出てきて、その問題を乗り越えさせてくれるんだ」という理解の仕方をして、人生を生き抜いていかなければなりません。**

**つまり、どういうことなのかと言ったら、問題というものには必ず答えがある、ということです。答えがある問題しか出てこないということですよ。問題というのは命に潜在する能力を引き出すために出てくるんですから、問題が出てきたときから既に答えは命の中にある。ただ、命から出てきていないから答えはまだないということになってしまうんですけども、だけど答えはある。答えのない問題は出てこない。解決できる問題しか出てこないんだということを我々はよく知っていなければならない。今の時代に存在する問題というのは、必ず今の人間の命に潜在する能力で全部乗り越えてしまえる問題なんですよ。時代が違えば、出てくる問題と悩みも違います。過去の問題はもう今は出てきません。それは既に乗り越えてしまった問題だから、だから過去の問題というのは現在生きている我々の中に答えがあります。ちゃんと答えを持っています。だから過去になった問題は今出てきても問題ではない、すぐ解決できる。今出てくる問題というのは、過去になかった問題が出てくる。過去になかった問題が出てくるから、新しい力が命から湧いてきて、その問題を乗り越えさせてくれる。未来の問題は今出てきません。その時代にならないと、その時代の問題は出てこないんですよ。今の我々の目の前に出てくる問題というのは、これからの人生を、これからの時代を生きていこうと思ったらどういう力を持たなければならないか、ということで問題は出てきて、その問題が命に潜在する能力を引っ張り出してくれる。そして、これからの時代に生きる力を自分に与えてくれる。そういう形になっているわけであります。それが命というものが持っている構造なんです。**

**どんな問題にぶつかっても、必ず解決できる。必ず答えはある。だから我々はどんな問題にぶつかっても、今の時代に出てくる問題は今の時代に生きる人間が全部解決できるんだ。どんな問題にぶつかっても我々は諦めたらいけない。どんな問題にぶつかってもうまくいくまでやめない。成功するまでやめない。答えが出るまでやめない。という生き方を覚えないと、我々は本当の現実を生き抜いていく逞しい力を自分のものにすることはできません。失敗した人というのは、途中でやめてしまった。答えが出るまでにやめてしまったから失敗の人生。成功した人というのは答えが出るまでやめなかった。うまくいくまでやめなかったんだ。**

**なぜ、途中でやめてしまう人とうまくいくまでやり続ける人が出てくるのか。その違いはどこにあるのか。それは失敗を続けて、失敗して失敗して失敗すると、ほとんどの人が「もうダメだ」と絶望してやめてしまう。しかし、成功する人はどう考えるかと言うと、「これだけいろいろやってなかなかうまくいかなくても、失敗するということは、うまくいかない方法を確立することだから、失敗というのは一歩一歩成功へと近づいているんだ」「失敗の連続は成功への確率を増やすんだ」と考える人が成功できるわけです。失敗することによって、もうちょっとで成功するかもしれないと。やめたらもったいないと思って、もうちょっとで成功かもしれないと思うから、やめられない止まらないかっぱえびせん状態になって、もうどうにも止まらない状態になり、成功するまで頑張ってしまう。そういうことになって成功するわけですよ。**

**これはエジソンさんの伝記に出てくる話ですけども、なぜであんなに何百と言われる発明・発見ができたのか。それはエジソンさんは失敗というのは人間にとって付きものだ。人間が不完全だから失敗をするのは当然だ。失敗したからと言って諦めたら、それは人間というものを知らないだけ。人間は不完全だから何回も失敗する。しかし、失敗するということは一歩一歩成功へと近づいているんだ。失敗しながら最後にうまくいくということによって、不完全な人間の実力はできるんだ。失敗を恐れたら人間としての人生は生きられない。失敗は当然、失敗しなければならない。失敗しなかったら実力ができないんだ。失敗を積み重ねていくということは、だんだん成功へ近づいているんだ。だから失敗しても失敗してもやめてはいけない。というのがエジソンさんの生き方なんですよ。世の中の落ちぶれた人と成功した人とを比べれば、確実に落ちぶれた人は途中でやめた人なんですよ。ちょっとやってみてうまくいかなかったら、「もうやめ、ダメだ」と思ってやめてしまう。だから成長できない。伸びていかない、使い物にならない。結局、現実から見捨てられてしまってホームレスにならざるを得ない。だけども、成功した人というのは、何回失敗しても何回失敗してもうまくいくまでやめなかったんです。成功するまでやめなかったんだ。答えが出るまで頑張り通したんだ。それが成功した人ということになるわけです。だから我々もこの不況の中で、あるいは毎日毎日いろんな問題が続きますけど、常に問題には答えがある。答えのない問題は出てこない。だから我々はどれだけ失敗しても何回失敗しても答えが出るまでやめてはいけない。そうしないと、本当に素晴らしい人生を生きることはできない。**

**なぜ、今自分の持っている理性能力で解けない問題に、諦めずに挑戦していると答えが湧いてくるのか。なぜ潜在能力が出てくるのか。その構造はどうなっているのか。命というものには、常に命を生かす力というのが働いているんですよ。我々は寝ていても死なない。生きているということは、自分で生きているのではない、命というのは常に命を生み出した母なる宇宙の摂理の力によって生かされている。だから、我々は寝ていても死なないんだ。自分で生きよう生きようと思ってなくても、寝ていてもちゃんと息をして心臓も動いて、ちゃんと生きているということは、自分の力ではない。それは宇宙の力だ。常に母なる宇宙の摂理の力で命を生かしてもらっているわけだ。命を生かす力は母なる宇宙の愛の力だ。その母なる宇宙の愛の力によって生かされている命が乗り越え難い問題にぶつかって、だけどここで諦めたら自分の成長はない、ここで諦めたら前に進めない、なんとか問題を乗り越えなければならないと思って、問題にぶつかっても諦めないで苦しんで悩んで頑張っていると、どうなるか。苦しみ悩むということは、命の在り方としてはだんだんと命が弱っていて死んでしまう方向性に向かっていくこと。そういうエネルギーなんですよ。だけど苦しんで悩んで頑張っていると、命には常に命を生かす力が働いていますから、苦しめば苦しむほど苦しさに耐えて、その命を生かそうとする力が増幅されていくんですよ。そうすると、命を生かす母なる宇宙の愛の力が何とかしてあげたいとして、苦しみというものに対応してくれる。そうすると、その問題を乗り越えるためには生まれながらに与えてある力の中のこの力が大事である、と母なる宇宙の摂理の力が引き出してくれる。そのときに知恵が湧いてくる、気付きが湧いてくる。「あ、そうか」というのは宇宙の摂理の力が、潜在能力つまりは生まれながらにその人に与えられているひとつを教えてくれる。これが今問題を避けるために大事なんだと。言うなれば、母性愛によって引き出してくれる。**

**命は常に宇宙と繋がっている。常に助けられて、宇宙の愛の力によって生きている。それにより、我々は現実の問題を乗り越えて、逞しく生きていくことができる状態になるわけであります。だから、そのようにして宇宙の力によって助けられて問題を乗り越えた人はどう言うかと言えば、「これは自分の力ではない、まさに天の助け」だと言うんです。あの有名な「プロジェクトX」 という、不可能を可能にした男たちのドラマというドキュメントの中で描かれているドラマは、まさに理性能力においては不可能だが、このままで終わってはならないという思いにより、「バカにした者を見返してやらないことには死ねない」として、とことん頑張る。その頑張って、頑張って苦しんでいると、母なる宇宙の愛の力が働いて、なんとかその問題を乗り越えさせてあげたいという思いが命に現れてきて、そして当面している苦しい問題は潜在能力のこの力を使えば乗り越えられますよ、と教えてくれる。宇宙の力が潜在能力を引っ張り出してくれる。だから、本人は「あ、そうか」と気付く形でその力を獲得して問題を乗り越えていく。あの「プロジェクトX」のドラマの中で描かれているわけであります。必ず我々が諦めずに頑張っていれば、常に母なる宇宙は何とかしてあげたいと思って助けてくれる。これはもうそうなんだと思って信じなければならない。それが問題には答えのない問題はないんだ、という考え方なんですよ。これはもう生物学的事実ですので、疑う余地がない命の構造なんですよ。どんな問題にも答えがある。諦めたら答えは出てこないですよ。ひょっとしたら答えは出てこないかもしれない。もうダメかもしれないと思ったら出てこないんだけど、答えが出るまで頑張っていると宇宙は何とかしてあげたいと思ってくれる。そのお母さんが何とかしてあげたいと思ってくれたら、もうしめたもの。お母さんが生まれながらに与えてくれているのが潜在能力ですから、その潜在能力のこれが今問題を乗り越えるために必要なんだよと教えてくれる。それに自分は気付く。そのようにして我々は、人生の問題を乗り越えて成長することができるわけであります。**

**ということを考えれば、我々が持っている理性能力というのは、すごい力だと思っている方もいらっしゃると思いますけど、理性能力というのは大したものではない。その理性能力が壁にぶつかってなんともならないという状況になって、命から湧いてくる潜在能力こそ、理性を超える大いなる力であります。理性能力に頼って、それで生きてる間はたかが知れた人生なんですよ。潜在能力の顕現・湧出は理性を超える力であるから、我々はすごいことができるという人間になれるわけです。**

**学校では理性能力をつくってくれるんですけど、その理性能力とはどういう能力なのかと言えば、理性能力の実態、学校で教えてくれてつくってくれる理性能力というのは、全て他人がつくった知識や技術を学習して覚えて、自分のものにするという教育をしてもらっているんですよ。学校で覚えた力というのは、自分の力ではない。他人がつくった知識や技術を学習して自分のものにして、いかにも自分の力のごとく使っているもの。言ってみれば理性能力はパクリなんですよ。自分の力ではない。他人がつくった知識や技術を学習して覚えて、自分が使っているという段階の力でなんともならないという問題にぶつかって、「だけどこのままで終わったらいけない」と思って頑張っていると、命から潜在する力が湧いてくる。そこから本当に自分の力で生きる人生が始まるんですよ。自分の命から湧いてくる力、誰のものでもない、自分の力。そこから本当にその人は、個性ある能力を発揮して、そして誰にもできない仕事をして存在感のある人間になっていく。命から知恵、気付きが湧いてきて、初めて自分の力で生きる人生が始まるんですよ。理性で生きている分には自分の人生ではない。理性的になればなるほど、個性はなくなります。誰でもない、一般的な人間の状態。理性的になればなるほど自分ではなくなる、個性はなくなる。個性というのは命から湧いてくる力ですから。命から湧いてくる力からこそ本当に自分の力。だから我々は、今自分の持っている能力でなんともならない状況にならなければ、本当の自分には辿り着けないし、本当の力に目覚めることができない。**

**あの松下幸之助さんとか本田宗一郎さんなんかは、小学校しか出ていません。松下幸之助さんは小学校4年生、本田宗一郎さんは小学4年生しか出ていないのに、なぜあんな人間になれたのか。世界的な大実業家になれたのか。それは理性で仕事をする段階を超えたからですよ。学校で勉強するぐらいの理性の能力なんて大したものではありません。他人がつくった知識や技術を借りもので仕事をしているだけですからね。他人がつくった知識や技術は全て過去のものだから、これから起こってくる新しい問題に対応できるはずはないんだ。過去の知識は過去の問題しか対応できません。新しく出てくる、全く新しい問題というのは、命に潜在する力が出てこないと解決できないんですよ。学校で学んだ知識はないよりはマシで、それも大したものなんですけども、だけども学校で学習した知識や技術では何ともならない状況になって初めて、本当の自分の力が、命が現れてきてくれる。そこから本当の自分の人生が始まる。本当の自分の力で生きる人生が始まる、ということをぜひ知っておいてもらいたいです。どんな問題にぶつかっても、とにかくは答えが出るまで諦めたらいけない。絶対にうまくいく、うまくいかないことはない、必ず答えはある、成功するまでやめない、という気持ちになったら案外と答えは早く湧いてくる。だけど、うまくいかないかも知れない、失敗で終わってしまうかもと思ってしまったら、命から湧いてくるものを抑えてしまう。出てこないんですよ。「絶対出てくる。絶対うまくいく」と思ってやっていたら、案外早く答えは湧いてくるんですよ。そういう意味で我々は、母なる宇宙を信じないといけない。必ずお母さんは助けてくれる。お母さんは自分に問題を乗り越える力を教えてくれる。是非、自信を持ってもらいたい。我々は命を信じ、母なる宇宙を信じ、またその母なる宇宙によって与えられた命を信じて、そして宇宙から与えられた力によって自分の人生をつくっていく。そういう生き方を覚えていかなければなりません。**

**そのために我々はどんな問題にぶつかっても諦めたらいけない。逃げてはいけない。これは本当に成功する人生を歩むための根本原理ですよ。とにかく問題から逃げた人間は失敗の人生で終わってしまうんだ。成功した人は乗り越え続けた人だけなんだ。自分の今歩いている道から出てくる問題というのは、「こういう問題を乗り越えていく力をつくってかないと、君はこの道で成功できる人間になれないぞ」ということを自分に教えてくれるために出てきているもの。常に問題や悩みというのは自分を成長させるために出てきてくれているんですから、今自分が選んだ会社から自分に降りかかる問題というのは、「この会社で出世していこうと思ったらこういう問題を乗り越えていく力をつくっていかないとダメだ」ということを示してくれている。「どういう努力をしたら君はこの会社で出世して大物になるのか。そのためにはこういう問題を乗り越えるための力をつくるべき」と、自分を成長させるために、努力の仕方を教えてくれるために出てくるのが問題。会社から出てくる人間関係の問題も、会社から与えられる問題も、全部これは自分の潜在能力を引き出すために与えられている。成功するためには問題を乗り越えるしかない。問題を乗り越えられなくて成功した人はいない。問題にぶつかるということはチャンスなんですよ。**

**今、激動・激変の時代と言われ、多くの人がその中でどうしていいかわからない迷いに陥っていますけど、激動・激変の時代こそ、全てのあらゆる新しいものが生まれてくる時代なんだ。世界中の若人が待ちに待った夢多き時代なんだ。激動・激変という状況になると、多くの人が、変化対応能力が大事だと、変化に早く対応しないといけないという考え方になってしまっているんですけど、変化対応能力というのは変化が出てきてからどう対応するか、という問題の後追いになってしまう。言ってみれば、問題が出てきてその後からどうしたらいいのかを考えるということ。ずっとその問題というものの支配から逃れられなくて、非常に嬉しくないというか楽しくない人生になってしまう。我々は歴史をつくるために生まれてきているんだから、変化の後からついて行くという惨めたらしい生き方をするのではなくて、「時の流れは自分がつくる」という自ら新しい時代の変化をつくっていく、すなわち、「自ら激動を起こし、自ら激変を起こす」と言う生き様をしていかなければなりません。**

**時代は常に変化を求めているんだ。あらゆるものは変わるんだ。100年前はまだちょんまげだった。100年経ったらもう世の中にあるものは全部変わっているんだ。60年前は敗戦で焼け野原だった。60年経ったらこんなに変わる。30年前のニュースフィルムを見たら笑ってしまう。とにかく時代は毎日毎日激変しているんだ。誰かが変えているんだ。問題の後からついていく、変化の後から付いていくという従属的な生き方はやめなければならない。素晴らしい生き方をしようと思ったら、我々は“時流独創”、「時の流れ自分がつくる」という精神で積極的に変化をつくり出す生き方をしなければならない。今こそ、その生き方をすべきときだ。激動・激変の時代こそ、まさにそういう自ら変化をつくり出す人物の出現を待っているんだ。時代はそういう人物を求めているんだ。我々は皆、その意味で新しい時代をつくるために生まれてきたんだ。何かを変えなければならない。自分で変えなくても、確実に誰かがあらゆるものを変えて時代は進んでいく。生まれてきたからには、我々は過去の人間が誰もやったことがないことをやって生きて死んでいく、そういう想いにならなければなりません。こういう問題があり、不況のときというのは人生におけるチャンスだ、という捉え方を是非してもらいたいと思います。今こそ我々は新しいものをつくり出す、そういう意欲に燃えなければならない。時代を変えていく、時代を自分の力で動かしていく。いわゆる、業態の転換という言葉で実業の世界では表現されていますけど、常に我々は業態の転換を図りながら新しい時代に対応する。そういう職業の在り方、職業の在り方をつくり出していかなければなりません。**

**ビールなんかでも、ビール業界が行き詰まっていたときに、アサヒビールがアサヒドライという全く新しいビールの味をつくり出して、ビール業界に歴史をつくった。また今アサヒビールの味がちょっと古くなってきて、また他のビール会社がドライを超える新しい味をつくり始めている。そのようにして、業界の歴史はつくられていくわけです。建築業界においても常に建物の形は変わっていく。新しい時代には新しい建物が要求され、また生まれてくる。少しでもより良い住環境というものを求めて人間は新しい欲求を持ちますから、より良い住まいは常により良い新しい形の建築物が求められていくわけであります。そういう建築物の変化というのは、自分自身がその建築の中に住んでいて、「ここはちょっと何か物足りないな」「ここはなんかちょっとあまり良くないな」「ここは何か感じが悪いな」そういうことを自分自身が生活の中で感じながら、「では、どういう風にしたら、自分にとってより住みやすい住宅あるいはより感じの良い住まいができるのか」。そのことを自分自身が生活をしながら感じ取って、それを形にして創意工夫していけば、確実に過去になかった全く新しい住宅ができてくるわけであります。またこれからの住宅は、これまでになかった素材でつくられるかもしれない。住宅の形も激変していきますし、また住宅をつくる素材も激変していく。新しい素材がまた新しい住宅のさまざまな可能性をつくり出していく。それも全部建築業界に属する人間たちの創意工夫、革新的な意欲によってつくられていく歴史であります。**

**自ら問題を感じ取るというか、問題が出てきてどうするかではなく、自らが問題を感じ取って、問題をつくり出して、そしてその問題に答えを与えていく。そういう能動的な、積極的な仕事の仕方を覚えないといけません。問題を感じるのは感性なんですよ。感性を磨いていかないと、我々は問題を感じるという力が鈍っていきます。問題を感じなかったら、変化は生じないんですよ。問題を感じた人間が、どうしたらいいかを理性で考えるんですよ。まず自分の理性を本当に働かせようと思ったら、問題を感じないといけない。皆と同じ問題を感じていたのでは皆と同じことしかできない。全く新しい問題を感じ取った人間だけが、全く新しいことができる。新しい問題を発見していないと新しい答えは出てこないし、新しい時代をつくっていけない。他の人間が感じることができないような新しい問題を感じる、そういう新鮮な活性化された感性の力を我々は磨いていかなければなりません。与えられた仕事をしていくだけでは、従属的・保守的な仕事の仕方なので、与えられた仕事をしてくだけではなくて、自ら新しい問題を感じ取って、新しい問題を提起して、積極的に変化をつくり出す仕事の仕方の一端を担い得るような社員になってもらいたい。そういう新しい問題を感じ取る力を持った人間が、その会社を発展させる推進力になっていくことができるわけであります。言われた仕事をしているだけでは、普通の人間だ。本当にその会社の歴史をつくり、会社の発展に役立つ人間は、問題を発見する。こういう問題がある、どうしたらそれを解決できるか。提言・提案をどんどんしていって、そしてより良い方向性に会社を成長させて、動かしていく。そのことのために問題を感じる力というのが、大事なんですね。会社というところは不平不満を言ってはならない。不平不満を言うようならもう会社を辞めるべき。大事なことは、「こうしたら我が社は発展するのではないか」「こうした方がいいのではないか」。そういう会社が発展するための提言・提案を出し続けることが、社員の仕事ですよ。その会社に入った限りは、その会社を発展させるための提言・提案をし続ける。それが会社のために問題を感じるという仕事の仕方であります。会社に不平不満を言っているようでは、それはもうその会社の社員ではない。会社を壊す人間だ。もうそういう人は辞めてもらうべき。提言・提案とは問題を感じて、そしてその問題を解決していくという働き方。とにかく、まず不況の時代を乗り越えていくためには問題を恐れてはならない。問題には必ず答えがあるということ理解して、答えが出るまで努力をやめない仕事の仕方をぜひ実践してもらいたいと思います。ということで前半の話は変わります。どうもありがとうございました。**

**それでは後半の話に入ります。**

**まずとにかくは、問題というものをどういう風に感じ取って、その問題を乗り越えていくかが不況のときにおいて大事な課題になってくるわけです。その次に大事な不況のときにおける、不況を乗り越える力をつくっていく方法論は、次は情熱を持って夢と理想を語り続ける。そういう活動であります。なぜそれが大事なのか。理想がなくなる、夢がなくなると、我々は現実の苦しみに押しつぶされてしまって、現実を生き、乗り越えていく力がなくなってしまう。だけど、夢さえあれば、本当に理想さえあれば、我々は現実のいかなる苦しみにも耐えることができる。夢のない人間は現実の苦しみに押しつぶされて、そして時代に流されてしまって、本当の自分の人生を生き、つくっていくことはできない。だけど理想と夢を持つことによって我々は、現実の辛さ、苦しさに負けない。どんなことがあっても現実の問題を乗り越えていく、乗り越えて夢や理想を実現する生き方ができることになっていきます。夢とか理想は、決して先の話ではない。夢や理想は今を生きる力だ。夢と言えども、理想と言えども、それは現実のただ中にあり、今を生きている人間が理想や夢を持つわけですから。理想や夢というのは、まさに今を生きる力なんだ。であるがゆえに、夢と理想がなくなってしまったら、我々は今を生きる力がなくなる。現実の辛さに押しつぶされてしまう。現実の苦しさに押しつぶされてしまう。そして自分を見失う。そして現実に流されて、「まあなるようにしかならない。まあ適当にやっていたらなんとかなる」というだらしない、流される生き方になってしまう。**

**だけど、理想と夢を持って生きる生き方はそれだけのことではなくて、人間と動物の生き方の違いというところにもその重要性があります。人間が本当に人間らしい人生を生きるためには、どうしても理想と夢と志が必要である。それはなぜかと言えば、人間以外の動植物は与えられた現実にどう適応し、どう対応するかという生き方しかできない。すなわち、本能によって支配された生き方しかできない。だけど人間は与えられた現実をどう変えていくか、どうより素晴らしいもの変えていくか。そういう生き方をするところに人間的という生き方が生まれてくるわけであります。人間でありながら、理想がない夢がないという生き方をしていることは、人間でありながら動物的次元の生き方に堕落していると言えます。人間であるならば、常に未来に夢と理想を語り続けなければならない。**

**どういう風にすれば我々は常に夢と理想というものを持ちながら、仕事をして生きていくことができるのか。そのためには自分自身が自分の命に対して問いを発する。「どんな仕事がしたいのか」「どんな人間になりたいのか」「将来どんな生活がしたいのか」という未来というものをつくり出すための問いが三つあります。「どんな人間になりたいのか」人間なんだから人間として人生を生きていこうと思ったら、どんな人間になるかを決めなければない。人間というのは抽象的な存在ですから、いるのは男と女だけだから、男であったならば自分が自分に対して「お前、どんな男になりたいんだ」と思わなければならない。そして自分の命から、「自分はこんな男になってみたい」「自分はこんな男になりたいんだ」という欲求を引っ張り出す。それがその人の理想なんだ。それがその人の夢なんだ。女性であったならば、「どんな女になりたいのか」とい問いを自分にしなければならない。「自分はどんなお母さんになりたいのか」「どんな奥さんになりたいのか」と問わなければならない。経営者なら、「どんな経営者になりたいのか」と問わなければならないし、営業マンであったならば、「どんな営業マンになりたいんだ」と問わなければならない。目標を定めないとそうなれない。目標がなかったら現実に流されてしまう。常に我々は目標をつくりながら仕事をしなければならない。目標をつくりながら人生を生きなければならない。人間であるならば、どんな人間になりたいのかを自分で決めなければならない。どんな男になりたいのかを自分で決めなければならない。何も出てこなければ、「自分という男は一体どういう男になりたいと思っている男なのか」と、男探しも必要になります。女性であれば、「どんな女になりたいんだ」「こんな女になりたい」ということを自分で決めないと、自分が定まらない。それがなかったら、自分は一体どうなってしまうの、という世界ですから、それでは自分を見失っていて現実に流されてしまう。まずは理想をつくるという方法論を覚えなければならない。またどんな仕事がしたいのかを問うて、「こんなことがしてみたい」と、やってみたいことを考えなければならないし、また将来どんな生活がしたいのかを問うて、自分にとって将来したい生活の在り方を絵に書いたようにイメージで描いて、「こういう生活ができたらいいよな。そうなりたいな」と思えば、では、そのために今自分がどんなことをしなければならないかが決まってきて、自分の現在の生き方が決まる。目標が出てくることによって、我々は現実の辛さに耐えられる現実を生きる力が湧いてくる。今何をして、今何をしたら良いのかが分かってくる。そういう方法で我々は、理想と夢を持って生きる自分というものをつくっていくことができるわけであります。**

**会社というのを考えたならば、リーダーあるいは人の上に立つ者、経営者というのは、どういう役割があるのか。長たるものは常に部下に対して夢と理想を語り続けなければならない。夢も理想もないような会社に誰が勤めるか。常に経営者は、全社員に未来への夢と希望を持たせる、というマネジメントをする必要がある。政治家の最大の任務は、国民に未来への夢と希望を与えることだ。よく政治家に正義とはなんなんですかと聞くと、ほとんどの政治家は「政治とは国民の生命・財産を守ることです」と答える方が多いんですが、それももちろんやらなければならない仕事ですけども、生命と財産を守るということだけでは保守的であって、現実をより素晴らしい方向性に発展させていく人間的な生き方にはなっていない。政治家が最もなすべき仕事は、国民に未来への夢と希望を与えること。そして勇気を持って現実を生きていくことができるように国民を仕向けること、そこに政治家の最大の任務がある。**

**またお父さんお母さんの子どもに対する任務が、子どもに未来への夢と希望を語り続けることだ。お父さんお母さんが子どもに夢と希望を語ることによって、子どもがまた夢を持って生きることができる。そういう人生を与えてあげる。お父さんであったならば、「自分は将来こんなことしてみたい。もし自分ができなかったら、お前代わりにやってくれるかな」と、子どもが小さい頃からお父さんは、自分の人生と仕事の夢を語りながら育てることをしなければならないし、お母さんも「私たちの家庭はこんな素晴らしい家庭にしたいんだ。だから皆、力を合わせて頑張ろう」と言って、子どもに夢を語りながら家庭をつくっていかなければならない。夢と希望を語らなければ人間的な人生は始まらない。夢と希望があってこそ、我々は現実を生き抜いていく力、苦しみに負けない力というものが出てくるのであります。今の歴史的現実というところに当てはめていくと、どういうことになるか。**

**今、残念ながらこれまで世界の指導者であったアメリカが潰れた。すなわち、資本主義経済の牙城と言われるアメリカが崩れた。そして今、アメリカは全世界に助けを求めて協力してもらわないと、アメリカを崩壊するという危機に陥ってしまっている。だから、今年になってヒラリー・クリントンさんが日本から始まって、アジアを歴訪して、そしてアメリカを救うために金を出して欲しいと言って、行脚しました。今、日本と中国は莫大な資金をアメリカに貸す、つまりアメリカの国債を買ってあげるという形でアメリカに金を貸して、そしてアメリカが潰れないで立ち直れるための協力をしているわけであります。ということは、もう時代はアメリカの時代ではない。**

**世界は西洋の時代から東洋の時代へと、その文明の中心を移し替えようとしている。これからはアジアが燃える。アジアが発展することによって世界は支えられ、アジアが発展することによってこれからの人類の歴史はつくられていくのである。ところがまだ中国やインドは、まだまだ人類の指導者としての能力や人間性を備えていない。中国の方々が全世界から信頼され、尊敬されるような能力と人間性を獲得するためには、まだ200年以上の長い年月を必要とする。今すぐにでもアメリカに代わって人類の指導者として、その働きをすることができる経済力と文化力と人間力を持っているのは日本人だけだ。そのことを考えたならば、我々は一時でも早くこれからの世界は日本人が支えていかなければならない。これからの社会は日本人が指導者として社会の役に立つような活動をしていかなければならないんだ、という自覚を持つ必要があるわけであります。そして、我々が子どもを育てる場合には、「君たちはこれから人類の指導者にならければならないんだ。だから全世界から信頼され、尊敬されるような能力と人間性を養っていかなければならないんだよ」と言って、子どもを育てなければならない。お父さんお母さんは小さい頃から子どもに「君たちはこれから人類の指導者にならなければならないんだ。だから全人類から尊敬されるような能力と人間性を養っていかなきゃならないんだよ」と。物心がつくかつかないかの頃から、子どもにお父さんお母さんは言ってあげる。子どもは「そうなんだ」と思って、そのつもりで勉強して努力して成長していく。子どもたちが誇りを持って、自信を持って堂々と自分の人生を生きていくことができるような状態にしてあげることが、お父さんお母さんの子どもたちに対する任務だ。日本人であることに誇りを持ち、また自分の人生の課題というものをちゃんと分からせて、人類の指導者になるという高い目標を自覚しながら勉強していく。そういう誇り高い生き方を子どもにさせてあげることが、親の仕事であります。**

**とにかく当面、人類をよりすばらしい未来へ導いていくための指導者は、現在のところ日本人しかありません。もうヨーロッパは古い、中世の時代にその役割を終えてしまった。旅行して我々は感動するのは、ヨーロッパの街に残っている中世末期からルネッサンスにかけての古い文化遺産に我々は感動して帰ってくるのであって、ヨーロッパには未来はありません。そこで未来を感じてくることはないんですよ、過去を感じてくるんですよ。過去の素晴らしさを感じてくるんですよ。だけど、アジアには未来があります。アジアはこれから発展する地域なんだ。これからアジア人がつくっていく建物や活動、仕事がこれからの人類の未来をつくっていくことになっていく。まだ残念ながら中国は、経済活動においても守銭奴のごとく混乱した経済状況であって、まだまだ社会から信頼され、尊敬されるような経済活動の状況ではありません。奥地に入れば、まだまだ不衛生で文化的には低いレベルにあります。そういう意味で中国の方々が世界から信頼され、尊敬されるような指導者としてのところまで成長していくためには、100年200年という長い年月を必要とします。まだまだ中国は欧米の技術や文明文化を学ぼうとして努力している後進国。もちろんインドはまだもっと先の役割を果たす国であって、まだまだ貧しい。今すぐにでも指導者としての役割を果たす力を持っているアジアの国は、日本しかない。そういう自覚と誇りを我々は待たなければならない。**

**今、世界文明の中心は日本の真上にある。これから日本人が人類の目標になってあげなければならないんだ。もう既に日本には世界の頂点を極めた産業・企業がたくさんあります。新日鉄の鉄もそうだし、自動車のトヨタもそうだし、さまざまな家電もそうだし、カメラもそうだし、いろんな面において世界の頂点を極めた企業群があるわけでありますけども、これからはただそれだけではなくて、全産業あるいは全ての日本人が、ある意味で人類が目指すべき目標になってあげるという役割を果たしていかなければなりません。「日本人のようになりたい」「日本のような国になりたい」という夢を世界に与えてあげるという働きを日本人はしていかなければならない。そのためには、我々は今どんな仕事をしている場合でも、どんな仕事をやっている場合でも、我々がどういう理想や夢を持って生きるべきなのかといったら、我々は今自分たちがやっている仕事で自分たちは世界の頂点を極めるぞ、と。自分たちはこの仕事で世界の頂点に立つんだ、と。世界の同業者は、自分たちを見習って、自分たちを目標にやってくるんだ。自分たちがこの業界の目標になってやるんだ。そういう目標、そういう理想を掲げて会社を発展させていく必要があります。グローバル化された社会においては、日本人が日本一を目指しているようでは生ぬるい。もうこれから目指すべき目標は、世界一でなければならない。すなわち、今我々がやっている仕事は、この仕事において考えることができる世界の最高水準なんだ。これ以上の仕事の仕方はないんだ。そういう誇りを持って我々は消費者に自信を持って対応していかなければなりません。今の世界で考えることができる最高水準の仕事の仕方ができる会社になることを、我々は目標としなければならない。**

**ということは、アサヒグローバルから言うならば、我々はこれから世界最高品質の住宅をつくって、そして世界ににおいて建築業界の目標となってあげるような仕事の仕方をしていこう。我々はこれから、こういう点において世界の頂点を極めようではないか。まあ、いろんな仕事の内容があるでしょうから、何らかの点で、何らかの事において、「これは我が社が今、世界の頂点に立っているんだ」そう言えるものを一時も早くつくることを目標にして、これからのアサヒグローバルは仕事をしていかなければなりません。何を以って我々は世界一に立つのか、それを決めなければならない。あれもこれもやっていたのでは、高さがでませんから。何かひとつ目標を決めて、この事に関してだけは、我々は常に世界のトップランナーとして走り続けていこう。この点において我々は世界の目標になってやろう。このことについては今我々がやっている仕事の水準が世界の最高水準だ。これ以上の仕事の仕方はないんだ。そういうものを早く何かしら決めるべきであります。そして全社員がその目標に向かって協力して、このことにおいて我々は世界のトップ企業になるんだ。このことにおいて我々は世界の頂点を極めるんだ。自分たちが世界一だ。そう言えるものを早くつくる。そうすればその水準に従って、あらゆるものがだんだんだんだんと世界のトップレベルに近づいていける。そういうものが次々と社内に出てきて、そして全体としてのレベルが上がっていく。まずは何をもって世界の頂点を極めるのか。そう言えるものを何かしら早くつくる必要があります。これは絶大なる消費者に対する信頼を獲得することになりますし、またアサヒグローバルに勤める全社員の誇りになる。**

**とにかくこれからはどんな仕事でも、何をもって世界の頂点に立つかを早く決めなければならない時代に入りました。今は東芝でも日立でもナショナルでもパナソニックでも、いろんな会社が何に特化するかを皆決めようとしています。何を持って世界のトップランナーとなるか、何で世界一になろうかを決めようとしています。それが現実の企業の方向性であります。もうこれからは何でも屋はいらない。なんらかの点で世界一というレベルに立ったならば、世界一の技術や製品やいろんなものを持っている企業が手を組んで、そして人類に第一級の品質の商品を提供する。それが今の企業の流れであります。これからはいろんな世界的なレベルで企業統合が進んでいって、いろんな企業がお互いに手を組んで、世界に最高品質のものを提供しようという時代に入っていく。時代は量から質へと転換していって、質の高いものを提供するということが、これからの目的であって大きな会社をつくることは目的ではない。最高品質のものを提供することがこれからの企業の理想であります。だからあらゆる領域において、最高水準のものを持っているものたちが手を組んで、そして最高品質のものを人類に提供する。という流れです。二番手と組んだら二流品。三番手と組んだら三流品だ、と。だから、トップ企業としか組まないという企業の成長の仕方の流れが今できているわけであります。**

**その意味においては、早くアサヒグローバルさんもこのことについては、「今自分たちがやっていることが世界の最高水準だ。自分たちは今世界の頂点に立っているんだ」という自信を持って仕事ができるものをつくっていかなければなりません。ではないと、これからの国際化された状況では、どんどん外国からも建築会社が日本に入ってくることになりますので、生き残ることが難しいです。早く世界の頂点を極めたものをつくっていかないと、その存在価値は薄れてしまいます。そういうことも経営者が判断することだけではなくて、全社員がそういう目標をつくるためのさまざまな提言をして協力して、そして早く世界一と言える何かをつくろうという団結力を持って、頑張ってもらいたいと思うわけです。不況時こそ、そういう夢と理想というのをつくってかないと、今の不況の状況を生き抜いていく生き方のが定まりません。何をもって世界の頂点に立つか、何をもって我が社は世界の頂点を極めるか、そういうことを是非話し合ってもらいたいと思います。**

**もうひとつ、不況のときにおいて大事なことは、今自分たちのやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさや凄さを、情熱を持って語ることができる力を全社員が養うことです。仕事というものは、職業というものは、それを必要としてくれている人が沢山いるから成り立っているんですよ。それだけでもその仕事の存在価値というのは意味があります。自分が誇りを持って建築業界で仕事をしていこうと思ったならば、このアサヒグローバルがやっている仕事の仕方なり、供給している商品というものが、どれほど素晴らしいものなのか、どういう値打ちがあるのか、どういう意味や価値がそこに込められているのか。全社員がそういう自分たちが今やっている仕事や提供している商品の素晴らしさと値打ちと意味や価値というものを、自信を持って語れる状態にしていかないといけません。なぜならば、人間の本質は心だ。心とは、意味と価値を感じる感性だ。人間は意味を感じないとやる気にならない。価値や素晴らしさを感じなければ命に火がつかない。全社員が今自分のやっている仕事に誇りが持てる。今自分のやっている仕事にどういう意味や価値や値打ちや素晴らしさや凄さや誇りがあるのか。全社員が自分の言葉として語れる状態にしていかなければなりません。そういう社員教育をしていく必要があります。**

**プロというのは、今自分たちのやっている仕事の素晴らしさを、情熱を持って語れてこそ。今自分たちのやっている仕事の本当の素晴らしさを自分が一番良く知っているんだ、と言えてプロであります。プロとして仕事をしていこうと思ったら、自分の仕事の仕方において消費者を感動させなければならない。自分のやっている仕事の誇りを語って消費者に感動を与えなければならない。そういう意味で是非今自分たちのやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを、情熱を持って語れる力を全社員が養ってもらいたいと思います。**

**まず基本的に、理想と夢を語るというのは、どういう風に自分の人生あるいは仕事上の理想、夢をつくるか。その方法論をちゃんと知っておいてもらいたい。「どんな仕事がしたいのか」「どんな人間になりたいのか」「将来どんな生活がしたいのか」を自分に問うて、「自分はこんな男になりたい」「私はこんな女になりたい」「将来こんなことがしてみたい」「将来こんな生活がしたい」…そういう命から湧いてくる欲求というものを持って、我々は理想を語るということをしていかなければならない。**

**そしてもうひとつは、職業において世界の頂点を極める。今自分のやっている仕事で世界の頂点を極めるんだ。自分が今世界一だと言える何かを自分の中につくっていく。会社としても、この点においては我が社が世界一だ、と言えるものを早く実現するようにしていくという目標を立てて、不況時を乗り越えていかなければならない。目標さえあれば、我々はいかなる苦しみも耐えられる。本当にその目標・理想が実現したいという欲求に燃えたものであったならば、我々はどんなに現実が苦しくても負けることはない。もうひとつは、今自分のやっている仕事の意味と価値と値打ちと素晴らしさと凄さを語って、今自分のやっている仕事に誇りを持つ。これもやはり現在の苦しみに耐えて生き抜いていく力になります。**

**その次に考えなければならないことは、我々は常に新しい時代をつくり出すために生まれてきたんだ。この不況時こそ、たくさん問題が山積する中で我々はかつてない革新を遂げなければならない。今まで誰もやったことないことをするということをやっていかないと、不況時におけるさまざまな問題は乗り越えていくことができません。そして不況時において我々が出すところの、さまざまな革新的でかつてないいろんな着想というものが、これからの未来においてかつてない飛躍をその企業に遂げさせる。そのために今一番大事なことは創造力、クリエイティブな力。どのように新しいものをつくり出すか、どうしたら新しいものをつくれるのか、創造力というものをどういう風にしたら自分のものとして持てるか。そのことを考えていく必要があります。創造力のつくり方、創造力のある人間になるための方法というものがあるわけであります。**

**とにかく企業は、創造的な人間を採るとか、採用においてもそんなことを言っていますけど、なかなか本当のクリエイト、本当の創造ができないというのが現実ではなかろうかと思います。それはなぜなのか。なぜ創造、創造と言いながら、本当の革新的な新しいものがなかなか出てこないのか。それは創造とは言いながら、皆、今自分の持っている知識、技術、固定観念、先入観念を使って創造しようと思うから、創造はできないのであります。本当に我々が創造的な仕事をし、革新的な活動をしていこうと思ったならば、我々は自分の中にある固定観念、先入観念を破壊しなければならない。固定観念、先入観念に支配されている間は、創造ができない。創造というのは固定観念、先入観念に支配されないで、何かしら新しいものを発想することで、初めて創造ということが成り立つわけです。破壊することができない人間は創造もできない。破壊するエネルギーが創造のエネルギーへと展開していくんだ。だからこそ、変化を恐れてはならない。常に変化をつくり出す。そのためには破壊しなければならない。古いものを壊して新しいもつくっていく。またその新しいものを壊してまた新しいものをつくっていく。常に革新の連続である。とにかく時代は常に激動である。常に変えていかなければならない。そのために企業は、常に創造力を要求せざるを得ない。固定観念、先入観にとらわれないで何事か新しいことを発想しようと思ったら、どういう方法があるのか。そのためにはどういう努力をする必要があるのか。**

**我々は常識で考えることをやめて、常識を考える。常識で考えるのでなくて、常識を考える。常に現在の常識を破壊していかないと、革新という革命的に新しいことは出てきません。では、常識を考えるとは一体どういうことなのか。現在の常識において、「これはこうするものだ」と言われたら、例え「こうするものだ」と言われたことになんの疑いがなくても、常に我々は「これをこうするものだ」と言われたことに対して、「果たしてそうだろうか？ 本当にそうなのか、本当にこのままで良いのか」と疑問を呈さなければならない。このままでいいのか、と言われれば、あらゆるものは変わる。そうなることによって、だんだんだんだん自分自身が固定観念、先入観念、常識に支配されないで、とらわれることなく何事かを発想できるという意識に成長していくことができる。常に疑わしくなくても、「果たしてそうだろうか、本当にそうなのか、このままでいいのか」と言ってみる。そういう積み重ねが必要です。でないと新しいものは出てきませんし、つくれません。なぜそんなことしないといけないのか。先ほども言ったことですけど、今から100年前は明治維新でまだちょんまげがあって、本当に江戸時代の名残があった。100年経ったら、もうあらゆるものは全部違ってしまう。60年前は戦争で町が焼けてしまって、本当に何もないような状況だった。それが60年経ったらこんなに変わった。30年前のニュース映像を見たら、「昔はあんなのだったんだ、笑ってしまうよね」ということになっている。**

**また、百科事典に書いてあることは、今の時点で真理と言われていることが書いてあるんですけど、今書いてあることは30年経ったらその半分は全面的に書き直しになるんですよ。あとの30%は部分的に修正ですし、30年経っても百科事典に書いてあることでそのままで載せられるのは、せいぜい20%。今、真理だと言われていることが、30年経ったら80%はウソになる。だから今どんなに確かそうに見えていることでも、今どんなに確かなことだと言われていることでも、一度は「本当にそうなのか？ 」と疑ってみる価値は十分にあるんですよ。学問の進歩というのは、今日まで真理であったものが明日ウソになることが学問の進歩ですから。真理が永久に真理であったら学問は進歩しませんよ。学問の真理というのは、今日まで真理であったものが明日はウソになる。それが学問の世界ですよ。それで30年経ったら半分は全面的に書き直し、あとの30%は部分的に修正されるんだ。30年経って何も変えなくてもいいのは20%もない。どんなことでも一度は本当にそうであるか、果たしてそうだろうか、本当にこのままでいいのかと言ってみる価値は十分にある。とにかく、どんどんどんどん現実の社会はかつてなかったものが出てくる。自分の身の回りにあるものは100年経ったら、全然ガラッと全部変わってしまう。全てのものは変化するんだ。形も色も機能も全部変わるんだ。誰かが変えるんだ。「こんなに全部変わってしまうのなら、自分もなんか関わっていないとおかしいのではないか」と思わなければならない。そういう変えることに対して積極的に関わっていこうと思ったら、とにかくは常識で考えるのではなくて、常識を考える。そういう努力をしていく必要がある。**

**もちろん、50%は常識で考えていてもいいんですけど、とにかくは仕事の中で50%はちゃんと常識的にやっていかないと、社会との交流ができませんからそれでいいんですけど。だけど、このままでは会社が潰れてしまう。何か変えていかないと会社は発展しない。だから、どこを変えようか、どう変えていこうか、ということも50%は常に全社員が考えていなければならない大事な課題であります。そして、毎日毎日会社の中のどこかが良い方向性に変わっている、というものをつくり続けていく。それは会社が生きているというです。生きている状態は変化することであって、変化しなくなったら死んでいるんだ。生命論からすれば、そういうことになる。会社が生きている状態をつくろうと思ったら、毎日毎日どこかをより良いものに変えていく、ということを誰かがしていかなければならない。全社員がそれを考えたら、すごい会社になりますよ。昨日までこうしていたけど、今日はこうやってみようとか。どんな些細なことでもいいから、とにかくはちょっとでもより良いやり方に、より良い変化をつくり出すことに心を合わせて関わっている。誰かが提案したなら、それに乗ってみる。そういう活力のある仕事の仕方をやってもらいたい。疑わしくなくても疑ってみるという方法を哲学ではどう言うか、方法的懐疑と言います。新しいものをつくるための方法として、方法論として懐疑、疑ってみる。これは哲学的に物事を考えていくためのひとつのパターン。哲学的に物事を考える方法論なんだ。そういう哲学的に仕事をする態度を学んでもらいたいと思います。科学=サイエンスというのは、事実を正しく知ろうという活動なんですけど、哲学というのは今ないものをつくり出していく未来をつくる学問なんですよ。哲学は理想を探求する。科学と哲学が協力をして歴史をつくっていく。これが学問の使命であります。**

**よく哲学を仕事に取り入れるとはどういうことなのか、とかいろんなことに哲学が必要だと言われます。哲学的とは、あらゆるものにおいて理想を語る。今までにないものをつくり出していく。そういうことのために必要な学問が哲学であります。科学は事実を事実の通り、ちゃんと知る。知識を創造するというのが科学の役割であります。だけど、哲学は未来をつくり出す。そのために理想を語る。理想、理念を語る。目標を語る。そこに哲学の役割があります。そのためには、現実を壊さないと未来はつくれませんので、ただ哲学的精神はパンクなんですよ。哲学者はちょっとなんとなくおとなしい、うっとうしい、暗い人間が多いと言われるんですけど、本当の本物の哲学者は、心の中は破壊的衝動に燃えているんですよ。あらゆるものをぶっ壊して、どう新しいものをつくろうかという情熱が哲学的精神と言われるものです。そういう意味では、企業人はすべからく哲学的精神を持って現実に対さなければならない。何ひとつこのままでいいと言えるものはない。全てのものをより良いものに変えていかなければならない。そのためには現実から問題を発見しなければならない。問題に気付かないと、新しいものは出てこない。問題を感じて発見して、問題が出てくることを恐れないで変化をつくり出していく。ここに創造的企業というか、企業が創造的な活動していくやり方があるわけであります。そのためには、50%は常識で考えなければならないけれど、あとの50%は常識を考えるということもやってもらいたいと思います。そのためには、「果たしてそうだろうか。本当にそうなのか。本当にこのままでいいのか」と問うて、ちょっとでも良くなるように能動的な、積極的な仕事をするというやり方であります。**

**最後の創造力のつくり方ですけど、もうひとつ創造力のつくり方があって、それはどういうことなのかと言ったら、現実への違和感。現実への違和感という感性の実感に命を懸けるという生き方であります。現実への違和感とは、仕事をしていても「なんかちょっと納得できないな」「おかしいな」「もうちょっと便利にならないかな」というものが、現実への違和感と言う感性の実感であります。これはどういう現象なのかといったら、いろいろと自分が感じることは、「君こそまさに、そこのところをもうちょっと納得できるものにするために、君はこの時代に生まれた人間なんだ。だから君はそのことに気が付いた。そして今君がそこにいるのは、それをするためである。それこそ君の存在理由なんだ」と天が、神仏が、歴史が、時代が、自分に教えてくれているという現象なんですよ。「君の使命は、君の命の使いどころはそこだ」と教えてくれているのが現実への違和感という感性の実感の意味であります。天啓の一瞬、天の掲示。ほとんどの人が、そういう天啓の一瞬を与えて頂きながら、「ま、いっか」とやらないでいる。「誰かがやるさ」と自分でやらないで放っておいてしまう。これがもったいない話で、自分が何とかならんのかと感じていることを何とかしてしまったら、確実にその人は「これは自分がやった仕事だ」というものを歴史に残して死んでいくことになりますよ。この時代に確かにいたという命の刻印を歴史に刻んで死んでいける人間になれるんだ。それほどの大切な仕事というのを教えてくれるのが、現実への違和感なんですよ。**

**しっくりこないところをしっくりくるようにすることが、創造力なんですよ。そういうことを天が自分に囁きかけてくれている。歴史がなんかぴったり来ないなと感じた君こそ、まさにそれをやる人間なんだ、と教えてくれているんです。ノーベル賞を受賞する人もそうです。皆がそれでいいと思っていることも、自分は何かちょっと納得できないなと、ちょっとおかしいなというところから研究が始まるんですから。皆、現実への違和感なんですよ。何かおかしい、なんか納得できない、なんとかならないかな、と。よく街には王様のアイデアショップというのがあって、ちょっとした実用新案とか意匠登録なんかで、従来あるものに工夫を加えて、便利な面白いものが並んでいるお店です。それも皆、仕事を退職してヒマな人が何か仕事をしているときにはできなかったことを、時間ができたから「なんかやってみようか」というノリで、ちょっと考えて工夫して、それで特許を取っちゃったりなんかして、商品化する。という形で出てきたのが、王様のアイデアショップの商品です。結構そういうものでも、毎月何百万売れるものもあるようです。是非そういう現実への違和感に人生を懸けるという生き方もやってもらいたいと思います。**

**なぜ、そういう現実への違和感に人生を懸ける値打ちがあると言えるのか。今存在するものに対して自分がなんか納得できないと思うのは、自分の持っている潜在能力が、気が付かない間に現実に存在するものよりも成長しているときにのみ、そう感じるんです。自分の持っている潜在能力が現実に存在するものとぴったり一致していたら、満足するんですよ。これでいいと思う。また自分の持っている潜在能力が現実に存在するものよりも遅れていたり、劣っていたら現実に存在するのに対して素晴らしいと思って感動する。だけど、素晴らしいとも思わないし、満足もしないけど、なんか納得できないと思う…このときは、自分の持っている潜在能力が現実に存在するものの水準を超えて、先に成長していってしまっているときだけ。潜在能力がなんかおかしいと感じているのだから、その人が本気になって何とかしようと思ったら、確実にその人は現実を動かせる、歴史がつくれる力があるんだ、ということを現実への違和感という感性の実感は教えてくれているということになります。そこまで分かったら、本当にもう仕事をしながら、あるいは生活をしながら、次々湧いてくる現実への違和感という感性の実感を大事なものだと考えて、それに人生を懸けようと思えるほどの素晴らしい現象であります。現実への違和感と感性の実感は確実に自分に、自分がこの時代に生まれてきた使命、仕事を自分に与えてくれているんですよ。是非そういう思いで仕事をしながら、ふと湧いてくる現実への違和感を大事にして、それを通して自分の仕事をつくっていく仕事の仕方を是非やってみてもらいたい。これも何か変えていかないといけない激変の時代の重要な生き方のひとつであります。**

**我々は決して激動・激変というものを恐れてはならない。激動・激変の時代こそ、待ちに待った夢多き時代なんだ。あらゆる新しいものがそこから生まれてくる。飛躍的な成長が遂げられる時代が激動・激変の時代なんだ。今、全世界的にあらゆる領域において原理的変革が求められているんですよ。今こそ我々は原理的変革を成し遂げる力を養っていかなければならない。過去に縛られずに、全く新しいものを発想することができる力、これが今一番大事な職業能力というか職業力であります。今こそ我々は、仕事に飛躍的な発展の歴史をつくっていかなければならない。**

**問題が出てくることを恐れるのではなくて、問題が出てくることを待ち望んで、その問題に答えを与えることへの喜びを実現していく。問題があってこそ、我々は成長できる。問題があってこそ新しいものがつくれる。問題があることは素晴らしいんだ。問題がないことは不幸だ。問題があってこそ人生だ。生きるとは変化をつくり出すことだ。変化しないことは死んでいるんだ。死んだ企業をつくってはならない。毎日毎日、命が輝くような活動を企業はしていかなければならない。そのために毎日毎日、どこか創意工夫をして、そして革新的、刷新的な変化をつくり出すことに喜びを感じる。そういう仕事の仕方が大事であります。**

**しかし、企業はただ変えるだけではなくて、上司の命令に従って仕事をしなければならないこともあるし、またお客さんの要望に従って仕事をしていかなければならないこともあるので、ある程度は常識というものもちゃんとわきまえて、常識を生きる力も必要なんですよ。それは現実に対応するために常識が必要です。だけども、我々は現実をより素晴らしいものに変えていくことも仕事として考えていかなければならない。そのためには、注文してくれたお客さんに対しても、プロとしての立場から「こうした方がもっといいですよ。こういう方法もありますよ。こうしてみたらどうでしょうか」と、どんどんどんどん提案をして、そして客が更なる満足が得られるような、そういうクリエイティブな提案をしていく。そのようにして、単に消費者の要望に応えて、消費者に引っ張り回されて、振り回されるのではなくて、プロとしての誇りを持って、消費者すら気が付かない素晴らしい水準というものを教えていく。消費者教育をしながら仕事をしていく、そこにプロとしての誇りがあるわけであります。そういう力を我々は養っていかなければならない。他社にはできなくても、我が社ならこんなことができますよ、と。そういうことをどんどんどんどん言える企業になって、そしてアサヒグローバルというのが独特の特色を持った建設会社として認められていく。そういう誇りをつくっていく必要があります。そのためには、全社員がそういう革新への意欲を持って、常に問題を提起し、常により良い方向性へとあらゆるものを動かしていく。そういう仕事の仕方を心掛けてもらいたいと思います。ということで、今日は今、全世界的に激動・激変という大きな時代の大転換期に差し掛かっていますので、こういう事態をどういう風に生きていったら良いのか、ということをお話をさせてもらいました。どうもありがとうございました。**